

全国大学病院輸血部会議

技師研究会のあゆみ

旭川医科大学病院

診療技術部 友田 豊



技師研究会発足まで

第1回輸血部会議（信州大学）（1970年2月14日）参加10大学

第1回 技師 2名 吉本氏（金沢大）、山本氏（大阪大）

第2回 技師 3名 吉本氏（金沢大）、山本氏（大阪大）、肥後氏（鹿児島大）

第3回 技師 2名 吉本氏（金沢大）、春日氏（信州大）

第5回 技師 5名

第10回 技師 11名

第19回 技師 24名

技師研究会発足まで

第20回輸血部会議 （弘前大学）

木村あさの 副部長が技師のために懇親会の2次会を用意してくれる。
全国20名ほどの技師が集まり交流を深める。

木村副部長

国立は私立に比べて技師の人数が少ない中で日夜頑張っているのだから
同じ国立の仲間同士が交流を深め輸血部の運営や技術向上のため
全国規模の情報交換の場を持つべきではないか。

技師研究会発足まで

第21回輸血部会議 （熊本大学） 1989年

全国から有志が集まり技師のための会議の設立準備を行う。

第22回輸血部会議 （三重大学） 1990年

本会議の下部組織として「全国国立大学輸血部技術懇談会」が承認され正式に発足。

第1回技術懇談会 (三重大学) 1990年

28大学から技師が出席 (全国43大学中36大学が加入)

年会費 1大学 2,000円

事務局代表

中島燿子(千葉大)氏、西村要子(熊本大)氏、堀江登志子(東大)氏

命名発案

滝沢金八郎 (東北大) 氏

発足当時の規約

名称：全国国立大学輸血部技術懇談会

目的：

- (1) 全国国立大学輸血部会議の下部組織として大学病院輸血部業務を円滑に進めるために、
相互の交流を図り向上に役立てる。
- (2) 文部技官としての地位の向上と身分の安定を図る。

組織運営：

- (1) 大学病院輸血部業務に携わる技師職員により構成される。
- (2) 運営(役員)は事務責任者と補佐するもの数名(若干名)を置く。
- (3) (役員)はその年度の当番校(全国国立大学輸血部会議主催校)と密接な連絡をとる。
- (4) その年度の当番校(全国国立大学輸血部会議主催校)の周辺大学は協力する。

第5回技術懇談会（鹿児島大学） 1994年

「全国国立大学輸血部 技師研究会」に名称変更

理由： 公式会議として相応しくない。
学術目的の名称がよい。

その後

第16回 技師研究会 （福井大学） 2005年
公立大学が参加

第17回 技師研究会 （北大/旭医大） 2006年
私立大学が参加
67施設 70名の技師が参加

第30回 技師研究会 （東京女子医大） 2019年
100施設以上の技師が参加

技師研究会 規約

〈目 的〉

全国大学病院輸血部会議の下部組織として、輸血及び細胞治療に関する業務を安全かつ円滑に進めるために、相互の交流を図ると共に業務の向上に役立てる。

〈組織運営〉

- 1 本会は、全国大学病院輸血部門に所属する検査技師職員により構成する。
- 2 本会の運営は全国7ブロックから選出された役員により執り行い、事務局代表はそこから、互選により選出する。
- 3 本会の運営に必要と認めた役員を別に選出することができる。
- 4 役員の任期は1期2年とし、再任を妨げない。
- 5 役員はその年度の当番校（輸血部会議主催校）と密接な連絡をとりながら、輸血部会議に合わせて技師研究会を主催する。
- 6 本会の遂行に必要と認めたワーキング等を別に設置することができる。

（付則）

- 1 この規約は、研究会の議決を経て改定する。
- 2 この規約は、平18年10月3日から施行する。

技師研究会の活動

- **第1期 第1回 (1990) ～第6回 (1995)**
発足当初の時代
- **第2期 第7回 (1996) ～第16回 (2005)**
国立大学が法人化⁽²⁰⁰⁴⁾される頃までの時代
- **第3期 第17回 (2006) ～第30回 (2019)**
私立大学が参加してからの時代

技師研究会の活動

第1期 第1回（1990）～第6回（1995）（発足当初の時代）

（文部省へ要求）

技師の研修機会の要求

技師長制の要求

増員要求

主任ポストの要求

会議・学会等の旅費要求

（学術活動）

冷式・温式抗体による不適合輸血の実態調査

全国調査が進み学会発表が盛んになる

（業務活動）

輸血検査24時間体制の構想立案（1994年当時、全国で5校しか実施していなかった）

技師の交流と互いの業務内容の把握が中心の時代

技師研究会の活動

第2期 第7回（1996）～第16回（2005）（国立大学が法人化される頃までの時代）

（文科省へ要求）

輸血検査24時間体制の整備が進むにつれ過酷な勤務体制(32時間勤務)の改善要求

増員要望

（業務活動）

各種の業務調査が更に活発となる

血液センターの対応が各県でバラバラであることが認識され始める

→ 本会議で団結して血液センターへの要求が増加

HLA適合血小板の抗体価の提供

赤血球抗原因子情報の提供

血液の安定供給など

団結し改善要求が活発化した時代

技師研究会の活動

第3期 第17回（2006）～第30回（2019） （私立大学が参加してからの時代）

私立大学の参加により会議の参加者が大幅に増加
国立と私立で会議に対する温度差が表面化する
国立大学が法人化され文科省への要求活動がなくなる
活動の中心が、診療・研究・教育と大学本来の姿にシフトしていく

診療活動 輸血患者の安全のため不規則抗体カードを作成し配布など

研究活動 治療薬の影響で輸血検査に支障をきたした場合の検査法の開発・普及など

教育活動 大学病院の技師を育成するための教本（症例集）作成など

技師研究会の活動

診療

輸血部門から技師長、医療技術部長などの管理職が出てきた。

研究

学会で評議員、理事を担う技師が出てきた。

多施設間の共同研究や学会発表、論文投稿が増えてきた。

教育

大学・各種学校の教員となったり厚労省の国家試験委員となり次世代技師の育成を担う技師が出てきた。

技師研究会の功績

技師研究会が発足して30年

輸血に携わる技師の交流が全国に広がり、結果として施設間、技師間の情報共有が進んだ。

活動領域が、診療・研究・教育と広範囲に発展した。

この会と技師が10年、20年後も益々発展している事を期待したい。

Thanks! 